

タイ語とラオス語の科学概念比較（III）

○石田 博幸^A、ブンヤン クルッタサンパン^B、ペンパン ガンピンヨウ^B
中部大学 現代教育学部^A、タイ・ラチャパットチェンライ大学 理科学部^B

1. はじめに 今までの発表の中で、タイ語とラオス語は酷似しているとしてラオス語を割愛してきた。しかし、昨年、提案した科学的概念を、自然に育成されるもの、と社会的に継承されなければ獲得が難しいものの2種類に峻別すべきであると提案したので、今回は、言語的要素を避けるため、タイ語とラオス語も間での科学概念の相違に注目した。

2. タイとタイの教育 今まで多くの発表をしてきたので、そちらを参照願いたい。

3. ラオスとラオスの教育 ラオスはインドシナ半島の中央を流れるメコン川の東側に沿い、川岸を除けば殆どがベトナムとの国境をなす山岳地帯でしめられている。宗教は仏教であるが、ラオ族が中心で、多くの少数民族は多種多様な宗教を持つ。歴史的には、周辺アジア諸国や西欧諸国の植民地として翻弄されてきた。戦時中は日本の占領、近くでは、ベトナム戦争前後のインドシナ紛争と内戦で、多くの国民が犠牲になり、隣国のタイとは異なり、現在も世界の最貧国のひとつである。

4-1. 同一起源を持つタイ語とラオス語 世界のどこを見ても大河が国境となっているところはない。タイとラオスはメコン川の両岸に位置しており、もともと同一文化圏に属し、2国に分かれたのは第3国の政治的な力による。今回は、比較的日常生活で使用されている言葉・概念を取り扱う。それによって新しい概念がどのように構成されてゆくのかをみれば、自然科学の抽象的な概念

が、異なった環境のもとで、いかに創りあげられてゆくか、それらは同じ用語でありながら、いかに異なった感覚でとらえられているかを理解することができる。

4-2. 例として文房具 同じジャンルの物の名前（概念）は、近い原理で構成されていると考えられがちだが、その言語圏に入ってきた時期によって、異なる経過をたどる。表に、本と鉛筆、ボールペンを比較した。本はタイ語が成立するずっと前、サンスクリット語の時代から仏教の經典として存在していた。もっとも、そのころは、折りたたんだものや、短冊に穴を開けて綴つるものであったが、本の名前はそれからきている。その意味で、本は、各地で特有の名前がつけられている。ヒンズー教がキーになっていると思われる事情があるが、当日話す。さて、鉛筆は、植民地時代に西欧から持ち込まれた。鉛筆を見て各自で判断して名前をつけている。ボールペンとなると、4ヶ国とも市場を占めている会社の会社名となっている。

5. まとめ タイ語とラオス語は源を同じにしている。故に社会や自然の事情による差のみが顕著に現れる。しかも、辞書にはあるものの日常生活では、失われている場合がある。例えば、大きな社会変革によって、過去に代々語り継がれてきた継承的概念が断絶している場合も考えられる。今後さらに調査を進め、科学概念の自然獲得と社会的獲得の違いを明確化にしたい。

日本語	ビルマ	タイ	ラオス	カンボジア
本	(文字+冊)	(皮+冊)	(読む+幸せ)	ジグザグ+?
鉛筆	(鉛+細長い)	(粘土+細長い)	(細長い+黒い)	(黒い+手)
ボールペン	ボールペン	パッカー（製品名）	ビック（製品名）	ビック（製品名）